

文化をつなぎ手にして

地域とともに歩み続けた 18 年。そして、これからも・・・

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団

横浜市磯子区民文化センター杉田劇場 館長 中村牧

豊かさの象徴としての文化

たとえば「コンサートを一流のホールで聞いてきた」「素敵なパフォーマンスを観たよ」人は非日常を体験して、特別な気持ちになる。

特別な気持ちは、心が動いていること。非日常を体験できる環境があれば、生活に刺激が生まれ、それが活力となり、豊かな生活そして豊かな文化を地域の中で育む原動力になる。

公共文化施設は、地域住民が文化で心豊かになるために設置されたもの。「遠くに行かなくても自分の町で」非日常の体験ができる機会を創出する、そのための地域の文化の拠点として地方自治体が設置した。全国に 3,000 近くある。

運営に携わってきたのは地方自治体だが、アートマネジメントのノウハウもなく、税収に左右され、運営が思うように成り立たない施設が後を絶たなかった事実がある。そんなさなかの 2003 年、小泉内閣の構造改革の一環で生まれた指定管理制度は、「ハコもの」といわれていた公共施設の在り方を変えた。少なくとも「少ない予算の中で地域のために何ができるか知恵を絞り、仲間を作ることでそれぞれの施設が目標を持ち、成果を追及するような自立した運営をしていかないといけない環境」になった。

指定管理者制度導入後、全国で最初に開館した公共文化施設が、横浜市磯子区民文化センター杉田劇場（2005 年 2 月 5 日開館 318 席の多目的ホール）だ。

ここに 18 年間の地域とつながりのきっかけや企画の一部を紹介する。

1. 地域の記憶と美空ひばりさん

横浜市磯子区民文化センターが開館するにあたり、2004 年に区民（17 万人）に対しひろく愛称の募集をかけたところ、杉田劇場という愛称になった。そこにはちょっとしたエピソードがある。

戦後間もない昭和 21 年(1946 年)1 月 1 日に芝居小屋として民営の杉田劇場(昭和 25 年 10 月倒産)が生まれ、歌舞伎役者たちが出演していた。その当時の杉田劇場は今では美空ひばりさんの初舞台の劇場としても認知されているが、2004 年当時はひばりさんの自叙伝に残されている初舞台の場所と違っていた。ただ、町の人「加藤一枝ちゃん(美空ひばりさんの本名)が歌っていたよ」との声や、元従業員が持っていたポスター・資料などから、8 歳の加藤一枝ちゃんが美空楽団で「美空和枝」という芸名で歌をうたっていた史実を発見し、「ひばりさんの初舞台の場所として杉田劇場は存在していた」ことを、2005 年の磯子区民文化センター杉田劇場の開館にあ



わせた記者発表でオープンにすることができた。そのことで地域の持つ「自分の住む街を愛し誇りに思う力」が注目された。開館前 2004 年に、美空ひばりさんと杉田劇場の関係性を職員総動員で、地域のみなさんや地元新聞社も巻き込んで夢中で探り当てたことが、地域とのつながりの最初であり、これから展開する様々な地域連携のきっかけにもなった。

こういう地域の歴史を紐解くために地域の人と「いそご文化資源発掘隊」をつくり、定期的に区内の史跡に赴いたり、地域のことについて詳しい人などを訪ねて話を聞いたり、調査活動を行っている。

2. 地域に根差すための杉田劇場独自の基本方針（オリジナルスタイル）

文化で地域をつなげるために〈つどう そだてる ささえる つなげる ひろげる〉を循環させながら、杉田劇場を地域により根差すように育てている。種まきと同じだ。

指定管理期間の 5 年間で 1 つのサイクルとしてとらえ、現在 4 回目のサイクルを実施。

区民の文化活動団体を支援し、自立する団体として育て、地域の担い手になる区民を増やしている。

事例) 地元のおやじバンド（イマージュ ISOGO）の支援

1 年目は（つどう）地域のおやじバンドチームに場の提供

2 年目は（そだてる）場の提供と舞台づくりを支援し、団体として成長

3 年目は（ささえる）自立した団体イマージュ ISOGO として団体を組織し、その支援

4 年目は（つなげる）アウトリーチ活動展開、アウトリーチ先を紹介

5 年目は（ひろがる）自主的にアウトリーチ活動、地域の文化の担い手に成長

現在は、この団体は杉田劇場の良きパートナーの一つとなる。

3. 指定管理者、公共文化施設の役割として・・・文化で地域の課題解決

横浜市の区民文化センター指定管理者は、公募で、5 年ごとに提案書を作り、審査員の前でプレゼンをして選定される。現在、当館は 4 期目 19 年目を迎えている。この 20 年間で、公共文化施設の役割は社会のニーズを受けて、大きく広がってきている。地域の文化の拠点として、施設内で完結する事業展開をするだけでなく、アウトリーチ活動や学校連携、地域連携、地域の課題解決まで多岐にわたっている。新たに加わった役割を達成する提案書をつくる中で一番大切に



していることは、「文化の持つ力をどう地域で役立てていくか」である。提案書の中では 5 年括りでテーマを決めて、事業展開を提案しているが、実際は日々、地域は変化をしているので、常に地域の声を丁寧に聞き取り、今、何が求められているのか、何が不足しているのか、文化でできることで解決の糸口を見つけて、企画を立てていく。

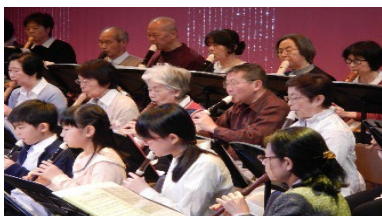
地域の課題解決型事業の例を挙げると

■1 期目（2005 年 2 月～2010 年 3 月）は＜区民協働＞をテーマにし、区民参加に重点を置いた事業を

発足させた。

- ・磯子区内の文化資源をめぐる「いそご文化資源発掘隊」開始。
- ・ボランティア組織「杉劇@助っ人隊」活動開始。
- ・劇場全館を開放する「夏まつり」「冬まつり」開始。

区民企画で生まれた0歳から参加できるコンサート「ひよこ♪コンサート」や80代も小学生も同じように参加する「杉劇リコーダーズ」(異世代のリコーダーアンアンブル、団員50名)は今でも続いているオリジナル企画事業だ。特に杉劇リコーダーズは、片や発足以来ずっと続けているメンバーもいれば、その一方で大きくなって卒業したこどもたちが演奏会や運営の手伝いにやって来る、目が不自由な団員もメンバーにいて、みんなが支える



立派な地域コミュニティが構築されている。地域に根付き、声がかかればどこでもアウトリーチに出掛けていく杉劇リコーダーズは、現在では磯子の親善大使となり、磯子だけにとどまらず、沖縄から北海道まで、特別支援学校や世界遺産の教会での出前公演を行うほどの人気ものとなっている。



▲夏まつり (京急杉田駅)



▲いぶきまつり (いそご地域活動ホームいぶき)

■2期目(2010年4月～2015年3月)は<街の賑わいづくり>がテーマ。地域連携の強化である。

学校連携事業「アート体験塾」を始めた。この事業は小学校との連携事業であり、地域の小学生に劇場に来てもらい、生の演奏やアートを体験する機会を届けている。これも現在も継続して行っている。

- ・磯子の歴史や文化をミュージカル仕立てにして演じる区民による地域密着型エンターテインメント集団「杉劇☆歌劇団」誕生。
- ・2013年から磯子区と共催で「磯子音楽祭」を開始(現在は杉田劇場が主催で実施)
- ・区民の交流の場として「杉劇ちょこっとカフェ」を開始
- ・商店街の店主が結成した「イマージュ ISOGO」や地元の主婦を中心に結成された劇団「横綱チュチュ」が活動を本格化。



■3期目(2015年4月～2020年3月)は<伝承文化で人づくり>がテーマ。地域の伝承文化を通して担い手を発掘し育成し、活発に実施した。

- ・地域の伝統文化の伝承普及を目指す「アート de 伝承プロジェクト」開始。

磯子区内の史跡や名勝を探訪し、神社に伝わるお囃子を伝承するために、地域の担い手が編集者となり、磯子区内の15の神社のことをまとめた本を制作した。

- ・学校教育にも地域の歴史文化を伝えていくため、伝統

芸能・古典芸能を体験できる鑑賞会を行った。こどもだけでなく指導する教員も対象にした講座も展開した。

- ・「歌声を届けようプロジェクト」学校・商店街と連携し、近隣の商店街にこども達の歌声が流れる取り組みを開始。
- ・放課後のこども達の居場所・見守りの場をつくる「ちょこっとカフェこども版」開始。
- ・区内文化団体・施設・行政の代表者のネットワーク「いそご文化円卓会議」開始。

■4期目（2020年4月～2026年3月）は、コロナ禍で始まった。

コロナ禍でできることは、人を集めずに、文化に触れる機会を作ること。

2020年夏、海に行くこともできない夏休みに、若い職員の発案で、SNSで呼びかけて、ギャラリーを海にしようと、魚のぬり絵を募った。個性のある数百枚のお魚たちが集まり、展示する様子も含めてSNSで公開し、杉田劇場のギャラリーに照明も駆使して豊かな海が出現した。ぬり絵を送ったことで参加してくれた全国から方々の熱い反響があり、発案者が、全国の声に後押しされて成長したことも大きな収穫。そのギャラリー展に触発された地域施設の若い世代が中心となって、できるところから、できることを連携しようと2021年に「つながる杉田」を立ち上げ、＜夏を楽しむ＞ぬり絵（作品）を各施設で巡回のギャラリー展を行い、施設を越えて、今、地域の事業として発展している。

コロナ禍で生まれた絆だ。

コロナ禍はとても文化施設にとって、集うこともできず、辛い時であったが、この3年間で悶々としていた時に生まれた＜何かしなきゃ＞という気持ちが、地域が一緒になってやらないと何もできない、始まらないという危機感があり、団結し、新しい事業を生み出した。また、コロナ禍は、保護者も学校に入れず、こどもたちの成長の様子もじかに見れないという悲痛な相談も地域の校長先生から受け、小学生の作品展をコロナで借り手が全くなくなったギャラリーを使ってもらった。会社帰りの保護者にも、地域の人達にも杉田劇場のギャラリーでわが町のこどもたちの作品みてもらえたことも、コロナ禍だったから考え付いた事業だ。そして、今まで以上に学校、保護者、地域、劇場の絆を深めることにつながった。

現在は、コロナ禍を越えて、共生社会をテーマに障がいのあるなしに関わらず参加できる「杉劇アート de にこにこプロジェクト」を展開している。

4. 誰でも参加できる「にこにこプロジェクト」

開館以来、地域の文化施設として、アウトリーチで福祉施設や高齢者施設、特別支援学級に音楽や文化を届けてきた。これでは一方通行だった。

乳幼児向けに音楽遊びやパフォーマンスをして、劇場を身近に感じてもらうロビーパフォーマンスという事業がある。療育センターのこどもたちや障がいのある乳児たちもやってくる。無料ということで、気軽にやってくるが、このこどもたちが、ホールの有料公演にやってくることはない。障がいがあることで、遠慮してしまうと、声を出してしまったら迷惑をかけるから行かれないと保護者や先生から話を聞いた。

地域には様々な障がいや事情を抱えている人がたくさんいる。磯子区民の人口は16,5万人。障がい者手帳を持っている人は1,6万人もいる。区民の1割だ。杉田劇場のホールの定員は318席。車いす席は

4席。そのホールに来館者として30人の障がいのある人が一人に来ることはまずない。障がいのある人たちだけを対象にしているコンサートはあるが、健常者と同じ場で、ともに楽しむ機会が少ない。地域に住むあらゆる人、誰でも参加できる事業として、<杉劇アート de にこにこプロジェクト>を立ち上げ、障がいのあるなしに関わらず、地域に住むあらゆる人が交流し、ともにアートに触れあい、ともに分かち合い、ともにアートを楽しむ場をつくることで、互いの表現を尊重し、共感し、笑顔あふれる関係性を作ろうと、現在、事業展開中。今年はにこにこ合唱団（36名、知的、身体障がい、こども、高齢、あらゆる人が参加している）を結成し、第9の大合唱で、磯子音楽祭に出演する。

2022年度に実施した内容は以下の通り

■創造プロジェクト

美術・音楽・演劇のそれぞれのジャンルで、障がいのあるアーティストや参加者と、地元の若手アーティストたちが一緒に創っていくプロジェクト

・美術系

【杉劇にこにこ見本市「カラフルワールド」】

障がいのある人のアート活動や、地域の居場所づくり活動に取り組むグループの作品展示と活動の紹介。絵や書道のアート作品、舞台衣装やTシャツなどの展示。

【杉劇にこにこ見本市番外編「麻美フィンランドチャレンジ出発式」】

昨年の「杉劇にこにこ見本市」に参加、障がいがありながらも活躍する画家の塚田麻美さん。今年のフィンランドでの展覧会が決まり、渡航へ向けて展示とトークイベントを行った。

・音楽・ダンス系

【杉劇にこにこ冬まつりライブ2023】

第一部は「杉劇☆歌劇団」によるパフォーマンスでの開幕、声楽家の米良美一さんと「杉劇にこにこ合唱団」による共演。



▲ドリームエナジープロジェクト

第二部はロンドンに滞在中の戸松美貴博さん（舞踏家）と「ドリームエナジープロジェクト」（ダウン症の若者たちの団体）がオンライン通信でダンス共演する画期的なプログラムと山海塾の舞踊家として活躍する松岡大さんと「スクランブル・ダンスプロジェクト」（様々な障がい者のパフォーマンスチーム）のダンス

◀スクランブルダンスプロジェクト

パフォーマンス。最後は磯子のシンガーソングライター・オオモリヨウヘイさんと「サファリパーク Duo」のトランペッター・野村琴音さん(脳性まひ)によるユニット「“P”otters」のライブ。

・演劇系

■地元発掘映像交流プロジェクト

地域の人と地域で活躍するスタッフと共に3年かけて、磯子の地域を題材とした映像作品を作成するプロジェクト。

【空から見る ISOGO —Drone in my city】

識字障がいを抱えつつもドローンパイロットとなった高梨智樹さんによる空撮。
杉田劇場 YouTube 公式チャンネルにて公開中。



▲“P”otters

■アート体験プロジェクト

【杉劇にこここアート体験塾】

子どもたちに時代が変わっても伝えていきたいことを、杉田劇場で体験してもらうプロジェクト。小学校の特別支援学級の生徒を積極的に迎え入れ、地域の小学校へアウトリーチ。

・横浜夢座 朗読「真昼の夕焼け」

昭和20年5月29日の横浜大空襲の実話を上演。

・アウトリーチ公演：雅楽の体験

■いっしょに歌おうプロジェクト

【にこここ歌おうワークショップ】

障がいのあるなしに関わらず、みんなで歌って楽しむワークショップを開催。

映画「天使にラブソングを2」で有名な『Oh Happy Day』をみんなで一緒に歌う。

さいごに・・・

18年経って、杉田劇場はやっと、地域の一員になった。文化で地域をつなぐこと、子育て支援や障がい・高齢者とのかかわり方などの地域の課題に文化活動支援を通して解決の糸口を見つけ、それぞれの担当部署の行政機関や町内会と連携してきた。

文化の力と地域の力を合わせて、地域の文化施設は運営されていく。今後は、さらに、地域の文化の担い手を増やして劇場と共に歩む、あるいは地域の担い手が、劇場運営を担っていくことがあるべき姿なのかと思う。